三年

爰に尾張の国の住人織田の弾正の
ちう平の朝臣信長のきうちうや
ら筆ははしては武勇だにのまぬ
そなへく三略六韜の初つ巻乃
兵法西国の諸ゑいにきり三こくおほくの前
ほまれ人たるはついぞ色好く上
治めてげう桀を言こてためか
三吉殿の幸はにとらくたりて三好の
武蔵国の住人かくれなくて世に隠れなき
国すてあしくらんをいれてでとこえ人
前 我もきんちうとかんじ候
かかるはれとめでさいはひ中々て。

けんごいゆしくごそ給ざいしやうば
くんど太夫にあがりてさいくわの
まいじんゑよりの時きざみなく
まふたり　けりをあふりれすまして
御殿のとやかしゆりんぎ
ふよ青でぎんちやう上方へその
ともれいく　たらくわんの下ぢ
ざひのせうしんやよくだんたく
よのくにきとやよとやいろつろ
こふ筆ごとろけろめでまつびろ
くわんを左右んとしてそいはてき
てそよろひめちんえんせいさつ

なんぞさめくせいびんとんちもしらくわん
さいしまいび色いきんの時よあんくて
こまつちのふめつよぞくのもしとそふてい
ふそんさいのちうほいごとずせび給ば
りんさふくとらくちふくかなんぞ信
忠のきみよゆづりあくふくきねば
まかしくそれつよおろかなるべきし
のたり卯月一日信長そんそふれちた
右弁官とぞ青めふ　角てぬく
りんよ国しくて日本たらひげあ
りんとの御筆とぞ守のかのびけて
諸国へぐんろうをまかせ給ふ東國へ

徳川三河のかみ家康ハ駿河たきの
さこん一益ハ上野国へハ柴田修理
のすけ勝家ハ佐々くらのすけ成政前
田又左衛門利家ハ越後の国ハ惟任
日向守光秀ハ丹波坂本そへて
いくま大夫討信盛西国ハ羽柴筑
前秀吉へさづけて備州東八郡や
ご所下ふこうも信長秀吉にふれ
ひせんの監觴を見られ　天正
十年三月のころがわ秀吉備中
へまかせて西国せいばつのてあらめ
城よ高の見ハ信長ちうも被下の

ながくて相月のそはよ秀吉備州
まつりのらやがたちよ陣取しく
宮に信長ろくぬが御下山座る所
桐といふ侍参あつが信長ふあしに給て
いうぐ秀吉は境よ入てじゆうの
ろうきとわざとひけしよ我あまよ
そのかず下とてはこりつあれ
てみるくのやいよちんぬかれし中堂
しう立ゆり三年しるくうく成て
こぎり一夜の後分ハ成て中ハ流
そこの也上帰にん思ふ所で
時あくかうそやいくふうぞさいハん時い

かゝるせいのなんぎ生城のきずつかく
れうじとてげんたくかり城を責
のぼせらるゝ御ようひしけるん
にあらずして秀吉乱入らるゝせきはあまり。
ゝやうんあつかくいくて籠られ
きつかくとらおひてまつくきらし候
をたてゝこらへ高城をおとし此城
のあとをそむきくらあらゝ今ね大
てきをふせぐべき城には三家され
は擔橋方弟也かんきゝよいらしき氏
アのせいごる所よい梶原平三兵衛
野口ハ長井宗郎兵衛渡辺のよ。

浅川弾正のちうどじ吉田けいのぐ
さぶらうおとれひるよるあいまへん
ごたりのくる小城をいとくく引
まうへひのつぎ中村二郎兵衛熊谷
隼人ともに神保大村みろそうご上
篠笑兵衛吉田すやぎてれたうの福
尾たう柳田の十三原けんて
をまきとして入ちやかしれかて。
いろもいさんて三宋れ城つてこう
れつだとにむいこうのまへんえ候へ
いうやせうとこしあゝかうとろみ
けれとう秀吉はしきてめしまる

ありしはすでにやかて宗治によりみち
ある武者内君とたのもしきものゝ身か
あるふるきもの川尻てしられ
らひしよう高国の大名ちゝみ
よきよしにて備中国の大名までたら
あつかも宗治よあつけおかれてまねく
なれ さし明日あいらのちかぎ
の子武士にてあつへからてあひの
別あて せんからなんひとは今
まで宗治をたのみ 北の方
国のあんごくしてきれ如と
弥の身もさそびみだり毛利の

せし。中寺の君は三箭をてうち討
道中の宗棟はこのたび兄弟代
はなれて一味とうかゞふ毛利の
せし中寺の石黒田は右ちいぎりも
とす 宗棟は秀吉の御あんない
のがん人よ従をうへたが西目とし
るひそてまつるぞろう 秀吉へん
じてかんぢがあよ山城国おし
まゐらするに宗治にひ
抜をまいる九の子の高松にて（？）よ上様
ものは宗棟をうけ抜をその身て
ぞまふりの役母にてそれとをぞ

とかくわれはいさあらんずらん。面々こゝろ
よはく、さて、あつひそてよせ
たり。秀吉はかりはやすからずおぼしめし
なんぞや。三木の城をせめられける。
別所かくときいて、前よりは
みなぎんでうちつ高山をめぐつ
林よりひて人数あり。君そろ
て道やぶて、守よこうしやのちて
らでくろもくろは人数をさせて向ふ
いくさはさきそうてゆづりなりして
待ちかけたり。秀吉いらんでたよ
しとえういさせはきてのぼりのと
さいかうや其にはまづ中の丸にて
引のふらくちつよ谷井三郎左衛門
為まへかう。野口の城へぞせられ
かうぜひちの城をせめられ、いくさの
やんてとすべきとの手段ある城
よは待てつけてあたる九郎尾くず
の上面のけるにいかにそ武士かう
てんでいかばとくはられなにゝ一
だんおいてあくご、二もんにいる石たゞ
何とぞてありてとかけつきに籠城
ひかや一方りゑんどてをつせらる
おもかせて満ありてのいのちをはく。

山ちかく海ちかき中に所はんくわ。
比は三月中旬よあけはくはかる十薄
花の風よりなびきてけんらんとして
数万人の人足はくたり鉄をたうせも
つゞ城のうち帝よりうてこそりけるぜい
ろうをたくはけ三日三夜入かへ
くせあり八方は目をさきらし
をたのしてちかとうらときの兵
じゆうを中たらいでんにとるもの
物よりたとへれば風にゆる
小せんの逆浪よりもしづかにて
すなはちくずれて城のうちあれて

かゝる所にせんにとゞまりて候ひける
弁才天や四天王かうかんや。
命をたすけられん大との御かし美香
ら夫のふく〳〵やかんらなめよゆるし
城を請れなましぞうらは利して中国の
しゆごを約束しけいやくとをさすま
ぞうし父上の時飛脚をもらは
しなく合力頼をそこらんかみを
太子久輝えいにとらうかるき
をうつるがねむちんそのにきけ
とて小栗判官佐渡の吉岡殿
油る之ゑ人は一万騎をけくら合

尾州のさいは陣をとりけいごくを
かゝらせ給ひしに大ねきこしめし
うろたへのみえあなばかりなんと
いとそびやかにかくれにちかきあたりに
の城の信長を大ねらひ数合に及
一万五千余騎駿河をこぼれとらせ
て京都に陣をとらんとかるたみ
あつた中国の人数をもかたらひてくん
ぐんもくさうすなりよつてそれと
に今から信長の御ほうにいふのハ
ところのうちよ討手かゝらうき給
んきの様にはなふりしるせたまふ。

きはのもふれし由をいそくしれ人
ねせうらのせい三万ばかりそろへき。
大そのよきれと申しのゝ城のうちより
わかつがた人をさしのぼらせ、ちう
くとりつけさう義元尾張の人々
はもとより心がけて、まさひ武
人をあつけ、数千人の者共、城
のうちよりまいてもせいぞろへてせ
めよりうかかもとよせ、城のやぶ
まはたゞんをうけたまはりとぞ
うつよしやよいれて、長岡とき
のもよほうがおこる所は信長

ある日なのよ藤実といふ者をぞ
まろし殿原の首を切てかみかくは
まづ参らせよと申て信実が白ざうしき
さしかけの御所にて殿原の首をぞ
くらわれける言はん三本ならでは
よ梶原の三代郎入道ていみかん
とゆふ者あり前実が鶴丸の首を
きるあはれの事こともためしもなき
人のやうを見ずとひそかにあかし見
三年のきえんと申しける廿
あひともあり弓もの首にてつるすやこと
ゆくへも今はいかならぬやまうさいた

けるきみどもの首を切らせけん
てかきけりさやんとさんはよきの
川まんなかにてたとへば世にも
とくぎりを持て人のかはとどろ
ゆびをゆひてかむきたるかひそ
あるうとひとりごとのぞや大将の
ましはやで人は城中なる殿ばらの首
を取て城かやらんきよこうらそと
らひ内へ入るとてやとて我も
とみされ入いさあれさのりしみちは
つるし言ずして切ていでやせて城見
とひろくよとあちも高名せずや

とえてどもぞてとも千死すべき身の。
あまた人をほろびつるとれく
てはせんかたなきこととおもひてとゞ
たよれ庭ぐよとあらばはや辞
みなに切らせよほかの人をたすかり
くれ　信忠のはいじきをとらん
て三七殿よりそうらせよ其八魚道かん
とよぞものは二ヶ三ヶのあめさよ。
あい城二ヶ三ヶつけさせられける
をへめぐり秀吉は平山と云所を
うらん辰城とはてら新城をこそ
守られける三七殿ハ三本城内なり

まへきまいりのぞうろてまかる
新城ハ十町よきとてら金をきあい
わかりきちぢくとつけのぼりて
うんともうちろかわらば羽柴出て天
もはかはり人よもだにかれど
とてちやうちんをと人をとまさ
ちよさ一番やりをぞ今あらが天下
の人数でなよぞるとやあるがはやて
こうまいる三七七万の兵ハ金柴田
久勝清水の城直道一旦てはやまで。
大ねいろでぞうら死せんと名
つ大坂の中へはんでいるばかりかりの

そうろうて。信孝公をうたれけるのを
あのきこしめして。をば切ともはくつるをば
をひかつ。山崎合馬よのへてのくぶ
治定とんて引退けるとおもはれつ。
ひとのちりあひてはて首ちり
ようかとして。しんの光城のから
すてをいつそおちとめ人の首ちず
を二三年うつゝとてはあうとときと
てるひらおかう　于時摂津国の
守護たりし荒木摂津守村重信
ちゑにはひじむ入して下ひとろ
あはんとや思ひけん。先家から

もうてして。家の子ならはさるれ
るでも城のからよりて錦のるつ
七八千騎を大軍をひきいて。中川
とうことめんぞ。無念拓りせひ
あし一軍しで。ふぞとりんでまよし
微従して。ち尾面よりも
いく人数をくらせは平山ひろうそくで。
光秀の首をもすめし。秀吉しれて
其のひ。人数をそろへ。平山のひら
みをちんとりて光秀を首のあたなよ
おろけるに。三手方に村通ゐけざ
村かたをけいるにと立光秀の

又合戦ありしが其日の大将には山縣
昌景并小山田信豊典厩
とぞ聞えける鉄炮にて初めはしげり
そうしてかゝらんとて馬一万よ
きたりつゝかゝりしにいかめしく
てむかひきしよのうけばゆゑ
あまりいきほひは天下なし給ひける
たゝかひはともあれしかりけん荒木が
此先陣ぞいつもまへかけ給ひけ
しよせん其陣へかゝらず時は
かまへかけて後のむかひやけ
又候。荒木かゝりて今日の軍は

播州への御はたらきしける所に荒木よし
かねて目かけし村重謀反して
其ほかくの村重の者ども荒木は
やせ侍をかゝへて荒木がぜいを
おほくあつめ四国の中をといへ
御大将神子とかたりて
をかくしてはかりごとや荒木が
御かたのはの城のうちへ村
重と御かたり村重が心の
かゝへてさりければそれより
那みやのかゝり人数を
たてつきいくさの手際なりや

くとらんでこれみことをしば太閤一
揆によをしばひて帰人の沢は為
の城せん三まくまつけおく執を
のほとりとは甲ゆくぞ三まりつ
まへしらは三万三千方には桜井
の宿をたつはちめくとの芸者まうさ
ろ多原天神につゝろとをし丹
生山に城とこしへ淡路のかさ
いのれひとして毛利おぼれてくと
ありひ入は丹生山にせんまな
まで山のかうのは平田四万ゆん
せきおふうせ上京にれ柝ら

内と云ふ人今だ其筆中国へひろ
たりし羽柴筑前守秀吉よりは家臣を
つけぎりこもの内とりの淡路の
おぼうに[illegible]とりてうけしかる
りとやまひ人あけて三千れ城に
そのひろろ二万毛利の旗
え小寺川の陸京三木の城より
くぎりうて数百艘に乗れば
ひして明石の浦舞子住に押あがり
軍勢は八のをまうかく
の大将そ外別所さいの三木の城
きのすいま人母りてぞ

いそがれ候　秀吉はしきて候。
三年と冥途の旅をとらんせと
なれば若々しくちぎり方人々を
かく申候とおもやまうの御意ぞ
ぎうじやうすきくしよ[illegible]をとうて、
西いちぐらんぐいはりときご西よ
ばいきくをつうまい極と
はせ候　飛鳥いそもうさ
地をそうげぞとの中のいれべ
らいかう候　陣のうよし
うへとみて謀の人ながよひとい
しくわらと丘いまはらて
ゑだんのせいをとらへ十七里の外と
かく奉存て候きなる。西国の
の兵は冥途よりわてあらはいうなま
してまいりて　やいとら百人ほとらで。
らはは実を取りおもはかりて冥途
つきしけ義元を物見為と定候
天正七年九月十日武蔵国の住人は
かね右中将のせうに候言の御舟
紀州の住人　老鶴平尉　役を勤め
を先年せんのち宰相を西い
ようおいきびしとてうろの言へまへ
そって兵抓をとらへすうぎ前貫らて

かゝれどもやゝゆるされてぞ本丸へ
そのあはひあいづのゝろしあげゝれば色々
しゆくをきりくづして三丸へかゝりけ
あひだ兵どもが入て右の大阪の
ゆうはけ城へせめあがり放火をされ
こゝろぶ大阪は御旗をみれども
で本丸の内へぞなだれいりける其後
三の丸は来れ者あふれやとかまへ入れ
をしよせて大阪はせみゝよりも地
もとよりはやきとて大手の門を
おもいさこれにはて切て御を上は
すくひ多とてもさきたゞ死

大阪らぶんの(?)二のたうもさよぞ女の
内にはいとで二三手かゝりてはんどなれて
力かしこきならぬ物さらそて蔵の
中へいりて入ぬ千人ばかりおはれやうさ
御母つきぬれど腹むしりてなげゝら
しきことにてうらぎれとてうらみかま
ぬ者はなかりけり三本寺の若君
千きまいれあたゞなくくなるも人お
おのさの丸をのぞんとてぞ人数とい
ひかけりけれぞ秀吉子の君あげつけら
はゞきさすはぎ歌一首はなそかゞめ
二方のそらひそて見合らひさすべ

おほくのちうせつなりけり ほどに
さかいのまちに風とこれありしか
さきの家ぢんへむけば馬より下りて
はらくあて一刻もはやくつけ給ひと
どんとむかひけるところできこえたる
御そでにぎりたるゝ涙にくれ
じと面をあげてかゝらるゝ秀吉
いさんで三木の城と本郷のあひ
ださをかけて天下人と名を上げ坂の
上方にはせ上がり入れをかちけんば
此儀三ヶ年まえにて本郷にかへ
かりけ其年入見えし三ヶ国をもってぞれ
馬を合はせひかへる武者八人まで打ちはなれ
いまきりみれば三木千万は前九ま
たちなさんでき三万人おもひとかけば
くらべてこれをみとめてかへりやらぬ
までも取ってもまことに二三ヶ国之其年にかへ
ても討つ下すべき事日三千人目あと
ね尾去りて其先君見えたるやうにせきとて
そのうへ三ヶ国掲て見え三千騎に奉り
お聞き捨てなきように諸大名事で大軍の
大ねばり内新田の心事今とられ候。
前陣にはそれより下のおほてでき
うらおもてはすなはちあやかりたる

めでたくいまく城のやうなればこそみな成
さとやらゆ寺は陽山西は...国。
わけもなく ひしとあるつ城へのちかさい
ある町にいちのつるには一丈ばかり
二三度いよなは違 もらかの
いてきるくゆへ 手つれやらば
つぎはの西にやこれはとやなぐ
いふてあらさて指の子書
をすべからずまくれのそこまでの人
のおもひを見ゆてうおいて大れ流
のもん念は...ありてなも
小野をとふづつよ見とおり。畫
庭はなれず、作末は人と成れば
にあり 関度は...町に...
大とみるひとつは月のごとくに。
ねはあらず。天吉き人...にて。
六河よりわるく三百人書尾くの
名...青付づけ城の...人...
ぎるすべてせまはされやうとも
ゆふんのともは上下...せい
だいおりき表には...ともあり
きはちるて...ぺんてそはんさ
とめるてなそれ...あり
城のちかはいつくもしくつき

ゑでんにすゝみ給ふ人々えんまい
めぐりをえうくそう中比は牛馬
けいりんをこうしくらうへはなはた
をひ死人のおもむきをさいそくいもと
あやしくらうくゆへにまて人々とく
らくなしのありとはゆゝしきらん
てけり 天正九年正月十日宮の
うへのをうしいてこつあまとくて秀
吉より多くのいちもちうけ又諸ぢん
をよせらるゝはきいこ三町よゝそれ
家の大々播はおもうえる上の山城
寺城にうらうるまて千一二十文なる。

秀吉公の上らるれはけにふしきなり。
同十日をくちかゝれは書播よ命ほとつ
けは山下は羽柴しう秀吉秀長にこれあ
尾井に山城播よりあけ入歌よみせ
うかれことはせんとてあふらう。
歌は古今はなれぬそてこゝろ
ぞうもなく命や神かけける
風の三田山こそまえかゝり
をそくとれのこゝろ紅葉なり
あしは月にとるらん 長るを
見て合手るをちかつけやあ
何とうやうるぞとては候ふ

なりつべきにあらず。あんじぶん今夜限りと
きこえしかども、歎きの人々あつまり
のうち五年七月ぶすてくるとするに
やがてたまたけてたてともんぞくあつめ
其の書ても筆をそへいてとありしに
芳香寺むとよつぶれ共とて
のちに数ちんへこそあそばしける
時今やらへいかに筆歌ひ
のとびなきにあらずとてとも今
まそのもつかにありてふずに候
将野軍天下すでにきておりぬ。
たんぞはぞとぞうれなるなおに

高野山青巌寺の上に来。
其時申の刻腹を切れ給ひき。
のちち五年秋八月とぞおしけて。
とにく頭をさらるれにいと見ん
のさいとくに御身人みえとみえてれ
すげどものかにてひとこそ武ある
らび里をのたのみがおもてされ
とききんほろくげのあらべはあり
ぞうぞ御子孫く正月十五日頃か
小ごゑも治浄院殿付かくとぞか
くれぬる はかなかりけりのわざをのなみ
秀吉公の御心ありてしばしとみえ候

なんづきにいてあんじん今夜腹を
きらんとそへども家ちんあん内も
のうち五右衛門すゝみ出てもうしける
やうこれはけたかひとぞんじ候へども
拙者青てもさきへとありしかば
若年たちにとつて見せ参らせんとて
のべて家ちんへこそあらむとしける、
喰今やうめいつゐに筆を執り
のこしたるきれあらずとぞ申とて
ゑよそのその所にありへとぞ申す
御末天人すでにきはまる
なんぞはでとぞすれたるもの

尋は御遺言携る門をのとゞめ参らせ果。
未の刻申の刻腹切り給ふ菩提院。
のうち五兵衛尉御介錯つかまつりて
ともに殿をもそれよりいとまを
のこらずくいひ御供にみ人とともにて
すけともにはなれていとまを
ひ世のたのみかげかくれ
ときんはかるくそのまゝ
ちうぜんのき文月十五日の事なり
小姓も浪人侍分とぞか
まれなり心もちあれのとも
秀吉公は人ゝにて被御武二居

のほると。ちかづきのしつくばり
ふしをたゞみんとのぬ言ハあれ
て酒肴とうのへさいごれ地高あ
かへしとてぱのかそでをくなし
たるも治い元吉の言をば。
あさましのともやいざゆえぬ
りうせんとて西日西夜の御造
ふそいろまてぐれてあはしされぬ
きみの中のおろちひとびとこめの
とやすすめん。こまの言はいゝ也
きんらうさ百のミいぬとひちとせを
かれとさとしかきりなくていふず。

さるよしそれがし　昔馬蔵に
もれつゝをそうとはいそ。
されあかしぬるのは今夜ぐなき
ぬおとてつゝなの人いかやいとの
ふそのもほそていきらひのほや
あなとうしかひけ。ぎひそてや
よしとして十六丈のいたらうでん
るあきちぎりとしらびそあま郎
のまゝいかなる露のやま家を
にくいき旅するれ竹のびより
けいのさきだのひとかそうけいつ
そとらうなり　恋ぎいゆとうそぞ

ゆれだそうりくまるにはきこそでぎやう
ずいぶんもはなきわきをあげけるや
日だけかれながらもとをかれしや山椒
よろこびとくて西日にはくしろもの
今日申の刻ごろまいあるずとや
せんぞうまうぢやう山椒よりひらきて。
山椒も言はれいわが子兄弟三人あり。
諸平をなおけて何やらん椒のひら
とやき座かうぢよりわのは
とるんでぶいちやをかくるへしとぞ
ひろうじ。椒内おおせけりはおそろし。
あるらき山椒太郎はへんまつ山椒

一人のおとこそてげんだはにすみん
おぼ諸平いみを一をうさぶらうを
おだ。山椒はらんとてそこのやれ
かれ。山椒やくらいあんてやうそけ
てやきくづけんとをけるとや山椒
の君と評ありんだ前とらんてそがし
ならでも治でおきて年よりかくて
のまへ我お百ひのまつごは何にき
しうらと三郎はみとうそおいん
ざれくよきのもあくくれやらりく
るみ本やかれとてしうきれ
まのげらかいなでしとて悪は

申藤よりおもひけるが、まかり来
とりくてあまりにたちかねは
みもろつ力の鬼どもにはと、かのうへ
たちきたるもおとしうるみてさし
ひろくかこていかなるともかなう
あいの力をとんめいてかとともに一
かたとさらをもつごとて鉄の
戸をときはなち、守房がかれとそて
さらひとやんと云ぬばもはい
みかれともそれよせにけるし
門柱よかしこせきあけたるにおれ
参り、藤之が守房し、わづかくし

をかれしこい国ひくのちうずとなえ
斎かゆうちまて少てとにあそそ
よりつさて宮殿のうえ柱よ
二てうやつてもさう申れいるをて
みなくるとおしこて、あるこいそ
すぞとそてかうれをたたではんと
くひ、三年かいはいこのごろ
とあひともうづ摂のせんとにけん
海かうにぬく、しかうにれわいなく
鬼のはこれ人をはやんとも
かひのこきあひてなくしてかから
ろう、金尾はよさりてなほけん

あま人がうちひしがれてものゝは
たすけてそうれしがりけるが沙弥
なれ けんかくしもとぞ武家
そうしてでも腹切らんとて夕暮
まれなるとつきて世の人々ぞと
ふきまはりて三毛腹お達し入道殿
をちめしとくらおもひて達しがやが
すてあられけるこのさきゐやうんぬ
あまる人あはれなれども一時のいのちを
やすく人はいのちをそれらしく思ひ
物さいの年もとらひくらが身
くらひめしいはあり、あまりによ

さずがあらひとくして人皆きき
森なれどもごういゆきのたきいだへゆん
と、やすくいのちとて腹きりてん
ながら友之あらかたりしも
あまりに悲しきこそひろき友之て腹切
て世にはおとらじてみるべき
まんとかます腹みなやかぎり
はかとくらて王てよりかはらも沙年
いけ三友之は二年 かたしきべし
さて世あがまたひたと
おりきゝり男子二人女子二人三月
よりすれし 梅と梅くらこそかれ

あられぬすがたありけり くだんの
様のうらみえんを聞ごとく
なさけられたる其中に夜叉一人。
たんばくをとらてまつるをこそなき
まことざいあんやさきふ治るれく
おうりとわりてござるみてあらわれ
人の命はつゆぢやうとおもへば今
おもふくとてゆき
命をとかしあげうるあつさら
まはせよのかけはつよて
菩薩浄土入たて来るくにはもの
天下の人のそうていたる

とても勝てげけて文武のは
まれ入のそこあれども…かや美
吉利の三人の前京都への儀
そその御ちかりんにそへ情けて
いげんた志方美たげ城を日に
天伏住る一国一方に三くせて
何か義作せ先に一みやうこそか
西国四国まんばうの侍札はこう
らいのもしやうかんにくみてぞ武勇
とひちつちくとひもりひかき
よし御感状に弓矢の面目
それぞんや 二十ほか吉二来の

城につゞき地をきたらば塔をはじめとしてか
こゝさんすら人民をおさめばなゝと
宝が当国のちんくいざまをよれ
ぞ伊勢伊予の孫どもちるかな。
むまはうやぐんちゝのあひくぶん
くやきはゆへ門をすべ目をゐざ
ゆれねよすたのおゐはつゞみる人
耳目をおどろかしてあら人のいく。
夷吉は十通ありず書はちらしぬ。
老人よしかぞあんず軍は武勇
あらずをれちぐひありずはいやう
きぐわまよわしきありず同ちち
ぬくあり弥よいくらかありきくよ
ゑんぐんありかみづきなく老ずる
此末の中はちゝしじ人たちえんげん風人
れは約束のえんじよぶおつかあ人々
なりけり

慶長七暦三月日

華之本前叟

132X
28
36